

皮膚科のトリビア

213

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」、そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

本欄は、小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ、連載しています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第54回神奈川皮膚科免疫アレルギー懇話会から
令和3年11月11日

抗BP230抗体単独陽性の類天疱瘡は炎症が弱く軽症が多い

抗BP230抗体は、水疱性類天疱瘡(bullous pemphigoid: BP)患者の6~7割に陽性と報告されている。抗BP230単独陽性のBPは、抗BP180抗体単独陽性あるいは抗BP180抗体と抗BP230抗体の両方が陽性のBPに比べて、年齢、性別、発症部位に違いはないが、罹患面積や重症度はいずれも低く、軽症例が多かった。通常のBPとはIgGサブクラスが異なり、補体活性が高いIgG1, IgG3が少なく、補体活性化が少ないので炎症が弱いと考えられる。

一方で、DPP-4阻害薬に関連するBPの中で、非炎症性のタイプには抗BP230抗体陽性例が少ないのに対し、炎症性のタイプには抗BP230抗体陽性例が多い傾向があった。

一言コメント

「当院ではすべての患者に両方の抗体を計測しているが、抗BP230単独陽性例も経験している。軽症例が多い印象はあるが、明らかな違いは明白でない。乾癬に合併する例が多いような気もしている。」

●第51回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会から
令和3年11月28日

ANCA関連血管炎の内服治療薬

補体成分5aがC5a受容体に結合することが、ANCA(antineutrophil cytoplasmic antibody)関連血管炎の病態に中心的な役割を果たすと考えられている。2021年9月、選択的C5a受容体拮抗薬のアバコパン(製品名タブネオス®カプセル)の製造販売が承認された。適応は「顕微鏡的多発血管炎、多発血管炎性肉芽腫症」、用法・用量は「成人に1回30mg、1日2回朝夕食後に経口投与」となっている。

第Ⅲ相の試験はANCA関連血管炎の患者を、アバコパン内服群とプレドニゾロン内服群に割付け、26週後と52週後の寛解を主要評価項目とした。26週の時点での寛解に関しては非劣性を示したものの優越性は示さず、ただし52週の時点での持続的寛解に関しては優越性を示した。

一言コメント

「企業からの情報提供がなかったので知らなかった。ほかの補体が関与していそうな血管炎や腎炎にも適応が広がるのか、注目したいと思う。」

●第51回日本皮膚免疫アレルギー学会総会 学術大会から

令和3年11月28日

アドレナリン蕁麻疹

精神的なストレスで生じる物理性蕁麻疹。赤い点の周りに白暈が生じること、 β blockerが有効であることが特徴で、コリン性蕁麻疹を合併することもある。

アドレナリン蕁麻疹は、急な緊張や高温の入浴などによる体温の上昇で生じるが、それに対してコリン性蕁麻疹は体温の上昇ではなく、あくまでも発汗と関連する。ノルアドレナリンの皮内テストで周囲の白暈とともに衛星膨疹が出現する。

一言コメント

「一見、樋口の点状紅斑に似ているが、個疹はあくまでも膨疹で持続時間が短い。これまでに経験しているような気もするが、診断がむずかしそうだ。」

●某製薬会社主催Web講演会から

令和3年12月15日

魚アレルギーはOASが多い

魚アレルギーはアトピー性皮膚炎に合併することが多く、その症状の多くは口腔アレルギー症候群 (oral allergy syndrome : OAS) である。抗原はパルブアルブミンと考えられている。魚類特異的IgEの中ではアジ、カレイ、サケが高値に出ることが多く、マグロ、サバでは引っかかりにくい。

パルブアルブミンが一番多く含まれる魚は、アカウオ (メバルの仲間) で、カツオ、メバチマグロ、ブリ、トラフグはパルブアルブミンが少ないことが知られている。

一言コメント

「魚によるアレルギー性蕁麻疹も口囲、顔に出現することが多いらしい。これもアトピー性皮膚炎のバリア障害を基盤とした経皮感作なのだろうか。」

●日本皮膚科学会第899回東京地方会から

令和3年12月18日

好酸球性環状紅斑とは

好酸球性環状紅斑 (eosinophilic annular erythema : EAE) の症例報告。痒みを伴う中心治癒傾向、辺縁に色素沈着を残す環状ないし連環状の紅斑で、体幹および四肢近位部に生ずる疾患。Well's syndromeの亜型と考えられているが、原因は不明。病理組織学的に真皮には稠密な好酸球浸潤があるが、皮下に及ばないこと、flame figureを認めることは少なく、末梢血中の好酸球増多も多くないことがWell's syndromeとの鑑別点とされる。ステロイド内服治療に抵抗性で慢性の経過をたどるが、ジアフェニルスルホンやヒドロキシクロロキンが有効な症例がある。

一言コメント

「原因不明の環状紅斑が体幹にときどき出て、いったん消褪してまた再発するといった患者にはしばしば遭遇している。遠心性丘疹性紅斑と診断することが多いのだが、皮膚生検をすれば好酸球の浸潤があるのかもしれない。今後の検討課題にしておこう。」

●日本皮膚科学会第899回東京地方会から

令和3年12月18日

アマンタジンによる網状皮斑

パーキンソン病による不随意運動抑制のために用いられることの多い薬剤。内服を開始して1年後に、四肢の網状皮斑が目立つようになった。神経内科領域では有名な副作用だが、放置されていることが多い。症例によっては四肢の浮腫を伴うことがあり、浮腫も網状皮斑も内服中止によって改善する。

一言コメント

「このように診断したことはない。これを主訴に皮膚科を受診することはないのだろう。皮膚疾患を有するパーキンソン病の患者はときどき来院しているが、処方歴と四肢の皮膚病変の有無を確認してみよう。」